

今年もやります！平和のための戦争展 2012

8月18、19日に開催 実行委員募集！



昨年高校生も参加した
ぶっちゃけトーク

「平和のための戦争展・のだ」を今年も開催するための、実行委員会が24日発足しました。昨年は5回目の記念大会として、文化会館を2日間借りきり約1,000人の人々が集い、戦争と平和、そして原発について、多彩な催しが繰り広げられました。

今年は、中央公民館を会場に8月18日、19日の二日間開催する予定で準備を進めることになりました。昨年の高校生などの若い方の参加を今年も継続したい、多くの人たちに伝える宣伝の仕方を工夫したい、など意欲的な意見も出ました。成功に向けてもっとたくさんの実行委員が必要です。次回実行委員会は4月15日1時半～4時中央公民館1階会議室で。個人でも参加出来ます。ぜひアイデアもお寄せください。

実り多かった学習会

「田中正造と野田との関わり」

野田・九条の会3月定例会では、4月8日の足尾銅山と谷中村跡へのバスツアーに先立ち、田中正造について学習会を行いました。この日参加された地方史懇話会の須賀田さんから、「田中正造と東葛飾郡北部地域の軌跡」と題する論文をもとに野田との関わりについて話していただきました。

その中で1896年夏に起こった大洪水の時、足尾の鉱毒を含む洪水が利根川を下り、利根運河に流入、そして江戸川右岸、現在の吉川市地先の堤防を破って東京下町を襲ったということ、これにより鉱毒で汚染されたヘドロは広範囲に拡散したという。次の年の3月衆議院で田中正造は質問の中で「関宿宿、二川村、木間ヶ瀬村、川間村、福田村ト云フ処ガ鉱毒ガ多イサウデ」と野田の地名も出して、政府に対処を求めている。その後「足尾銅山鉱業停止請願」には、栃木、群馬、茨城、埼玉、千葉、5県の町村長83名が名を連ね、その中に現在野田市となっている町村長7名の署名もある。

田中正造について、今まで漠然と足尾鉱毒と闘った人としか知らなかったが、今回野田との関わりも知ることができた。そのほか、富村さんのレポートにより、田中正造が被害住民とともに闘った「押し出し」という政府に対する直接行動、そして谷中村廃村反対の行動など多くの事を学びました。8日のバスツアーではこの日できなかった田中正造についてのNHKの番組をバスのなかで見たい予定です。バスの座席まだ余裕あります。直前まで受付ます。

☎ 7129・4297 (田口) まで

今月の予定



- 4月8日(日) 田中正造に学ぶバスツアー
7時半文化会館駐車場集合
- 4月14日(土) 2時～4時 定例会
櫛のホール4階研修室
- 4月15日(日) 1時半～4時
平和のための戦争展実行委員会
中央公民館会議室
- 4月16日(月) 午後4時～5時
さよなら原発署名 梅郷駅西口

九条の眼

沖縄では、原発事故のすさまじい被害を沖縄の基地と重ねて考えないわけにはいかない。最も貧しいところに、危険でまた地球に害を及ぼすもの、最も嫌われるものを、経済振興というアメをつけて押し付ける。地元はアメによって潤い、それに依存せざるをえず、将来に負荷がかかり自立が困難になる。その構造は、基地も原発も同じだ。

由井晶子著『沖縄 アリは象に挑む』より

「原発いらない」の声は 痛恨の思いを込めた県民の叫び

清水 修二 (福島大副学長 「原発いらない! 3・11
福島県民大集会」呼びかけ人代表)

3月11日が再び巡ってきました。一年前のあの頃と同じように、今日は寒い日となりました。あの日いつも通りの平穏無事な日常が一瞬にして一変し福島は、そして私たちは最早それ以前と同じように生きることはできなくなりました。

津波で肉親を失い、家を失い今なお故郷に戻ることも身内の遺体を探すことも叶わぬ人々がいます。地震や津波を免れたにも関わらず、放射能のため故郷の山野を後にして避難を余儀なくされている人がいます。避難の中で尊い命を落としたお年寄りもたくさんいます。母親は子どもたちの将来に、言いようのない不安を抱えています。

家族や地域がバラバラになり、人々の絆が至るところで断ち切られる事態が生じています。農家は生産の喜びを奪われています。地方自治体は存亡の危機に瀕しています。一見すると、町は平穏無事でいつもの風景が目に見えます。しかし、よく見ると子どもの姿が見えません。福島県の人口は一気にそして現在もなお、ジワジワと減り続けています。復興のかけ声は高く上がっていますが、足下の除染さえ遅々として進みません。避難生活が長引くに従って故郷に戻る気力は萎えていきます。これまで原発の危険性に警鐘を鳴らしてきた人ですら、こんな悪夢のような事態の出現をどれだけリアルに想像し得たでしょうか。

3月11日、この日は亡くなった多くの人々の霊を慰める鎮魂の日です。しかし、福島では災害は今も進行中です。目に見えない放射能という敵に包囲されて私たちは未だ、魂を静めるゆとりを持つことができません。福島で今何が起きているか、本当のことは、未だ多くの日本国民に理解されていないと思います。

放射能でバタバタ人が死んでいるわけではないし、人心の分断と言った社会現象は、放射能と同じように目に見えないからです。原発というものがまかり間違えば、国の破滅にすら繋がりがかねない巨大な危険性をはらむものであることを、今度の事故は私たちにハッキリと示しました。世界有数の災害国である日本が、50基を超える原発を運転してきたことがどんなに無謀で異常なことであったか、福島の私たちは身をもって知らされました。

福島県は原発に依存しない社会を作ること宣言しました。けれども、その声はまだまだ日本の隅々にまで届いてはいません。それどころか、電力不足や地域経済の打撃を理由にした再稼働の動きが、急速に高まって行く気配があります。今日、ここ郡山だけでなく県内各地で様々な集会が行われています。場所は離れていても県民の気持ちは一つです。

「原発いらない」の声は痛恨の思いを込めた福島県民の叫びです。この叫び声を全国の心ある人々の耳に届けるのは福島県民の使命であり義務であると思います。

3月11日「福島県民大集会」でのあいさつ

いいのだろうか、途上国への原発輸出

緒方 貞子 (国際協力機構(JICA)理事長)

東日本大震災で引き起こされた東京電力福島第一原発の事故を受けて、私なりに原発の是非を考えた。自分の国でうまくできなかったものを、外に持って行っていいのだろうか。福島原発の事故について、地震や津波があったからという人がいるが、日本はそもそも地震大国だ。

日本ほど技術が進んでいる国で、しかも(原爆を投下された)広島、長崎の経験があり、原子力に慎重なはずなのに、こんなことになった。原発への理解が不十分だったと言わざるを得ない。太陽光、風、地熱など再生可能エネルギーの進歩は著しい。多様なエネルギー供給のあり方を真剣に考えるべきだと思う。

朝日新聞3月24日朝刊「私の視点」